

8月初旬の2週間、協定校である米国ボストンのMCPHS大学に、勝見准教授、内藤助教、太田事務職員の引率のもと、2年次生、3年次生の10名が留学しましたので、その様子を報告いたします。

■3年次生 板垣 里奈

MCPHS大学への留学は私にとって感動と驚きの連続だった。たくさんの素敵な人々、異文化との出会いを通して多くのことを学び、留学に行く前と比べて自分の価値観や考え方が大きく変化し、新たな目標もできた。MCPHS大学での英語の授業では発音練習やリスニングだけではなく、薬剤師と患者の電話対応や服薬指導のロールプレイングを行い、アメリカの薬剤師の仕事を体験することができ、とても興味深かった。アメリカの大学の授業では自分の意見を持ち、それを伝えることが求められた。初めは緊張と自信のなさから発言するのをためらっていたが、現地の先生のアドバイスにより文法の正確さよりも自分が伝えたいことを最後まで相手に伝えることを実践できた。薬学の授業では日本で以前に習った内容を英語で学び、少し違った視点で考え理解を深めることができたように感じる。

また、科学の世界では学ぶ際の言語は違うものの学んでいる内容は同じであり、科学は世界共通であるということを再認識することができた。病院・薬局見学では日本とアメリカで様々な違いがあり、アメリカの病院には薬剤師の他にテクニシャンがいて調剤の業務をしており、薬剤師は彼らを監督する責任があるということ、アメリカの薬剤師はワクチン接種をすることができ薬局の一角にワクチン接種の

ブースが設置されていることに驚いた。自由時間には自分たちで計画してボストンの様々な観光地に出かけた。特にレッドソックスの野球観戦やプリマスの観光、現地の学生とのボストン散策、ダックツアーはとても楽しく一生忘れないであろう大切な思い出となった。

今回の留学はただ楽しいだけのプライベートの旅行とは異なり、安心した環境の中で多くの刺激を受け、私の今後の人生に大きな影響を与える充実した2週間であった。サポートして頂いた先生方、家族に感謝するとともに、この経験を糧に広い視野を持ちグローバルに活躍する人材になりたいと強く思う。



現地の学生とエーコン通りにて



サマープログラム修了認定を受けて  
(筆者：前列左から2番目)

■2年次生 木村 葉よう

アメリカの医療制度は日本と異なる点が大きく、それによって薬剤師の役割も日本と異なっていた。MCPHS大学サマープログラムで、日本の医療制度に活かせる点、日本の医療制度の方が良い点、両方を感じることができた。以下に、アメリカの調剤薬局と病院の特徴について述べる。

Community Pharmacy (調剤薬局)

アメリカの調剤薬局には、薬剤師の他に、Pharmacy Technician (薬剤師アシスタント) がおられ、薬剤師の調剤業務を補助することで、薬剤師の業務の負担を減らす役割を担う。一方、薬剤師は患者さんに予防接種を行うことができ、処方箋のRefill (処方医の再診なしに、薬剤師が同じ薬を、患者さんに再び渡すこと) ができる。このようにアメリカの薬剤師の業務は日本の薬剤師に比べて幅広

く様々なことができる。これらの薬剤師業務は、今後、地方で医師不足が深刻化する日本においても導入が期待されており、薬剤師の地域における需要や重要性も高まると考えられる。また、アメリカでは、日本の国民皆保険とは違い、患者さんそれぞれが異なる保険を持つため、その保険が保障できる薬も患者さんごとに多種多様である。そのため、薬剤師は、処方薬やOTC (一般用医薬品) を患者さんに提供する際、患者さんの持つ保険が保障できる薬を確認し、その薬に変更できる場合は処方医に確認をとり、また、必要とする薬が保険の対象になるように保険会社と交渉するように処方医に依頼するなど、薬剤師の業務と保険は切り離せない関係となっている。実際、保険会社との交渉が上手くいかず、全額患者負担となり、経済的事情により患者さんが死に至ることがあり社会問題となっている。

## 病院

アメリカの薬剤師は、院内薬局よりも各診療科にいる場合が多い。それは、薬剤師がチーム医療の一員として、医師、看護師等と連携して薬の相互作用を確認したり、適切な薬を選択するなどして、患者さんの近くに寄り添うことが必要とされているからである。また、アメリカの薬剤師は、Residency（研修）を経て、がん、糖尿病などの専門薬剤師になることができ、専門の科の薬を処方することもできる。アメリカでは、薬剤師の権限が大きく、その分、勉強する量は増え、責任も重大であるが、アメリカの医療制度において薬剤師は重要な役割を担っていると感じた。最近では、調剤などの業務にAI（人工知能）を活用するなど、薬剤師業務はより専門性が高まりつつある。実際、見学させていただいたDana-Farber Cancer Instituteでは、薬を運ぶロボットLucyが試験的に導入されていた。今後、病院で活躍するAIやロボットを管理する薬剤師も増えてくることが予想される。

私が薬剤師になる頃には、医療制度が変わり、薬剤師の行う業務が増えてくるかもしれない。しかし、患者さんにとってのベストな医療（薬）を受けたいという気持ちは変わらず、薬剤師も患者さんに良くなって欲しいという気持ちは変わらないであろう。薬剤師は、今後、あらゆる状況にも対応していく必要があり、そのためにたくさんの知識や経験が必要となると考える。MCPHSサマープログラムを通して、アメリカの薬剤師事情を学ぶことができ、もっと自分自身が成長しないといけないと感じた。このプログラムに関わってくださった方々に感謝の気持ちを忘れず

に、京都薬科大学での生活とその後の薬剤師としての生活を過ごしていきたい。



薬物動態学のクラス  
(Iman先生が分かりやすく説明してくださり、  
2年次後期の薬物動態学の良い予習となった)



Dana-Farber Cancer Institute  
(実務の先生と実習中の学生2人が病院内を案内してくれた)  
( ▼: 筆者)